

(19)日本国特許庁 (J P)

(12) 公 開 特 許 公 報 (A)

(11)特許出願公開番号

特開平5-311675

(43)公開日 平成5年(1993)11月22日

(51)Int.Cl. ⁵	識別記号	片内整理番号	F I	技術表示箇所
E 0 2 D 27/01	1 0 2 A	7014-2D		
	D	7014-2D		
27/08		7014-2D		

審査請求 未請求 請求項の数 2 (全 4 頁)

(21)出願番号 特願平4-123292

(22)出願日 平成4年(1992)5月15日

(71)出願人 000150615

株式会社長谷工コーポレーション
東京都港区芝2丁目32番1号

(72)発明者 片岡 智

神奈川県横浜市戸塚区原宿町483-11-903

(72)発明者 熊谷 正樹

東京都大田区南蒲田3-10-10-405

(72)発明者 渡辺 幸治

東京都大田区萩中2-6-1

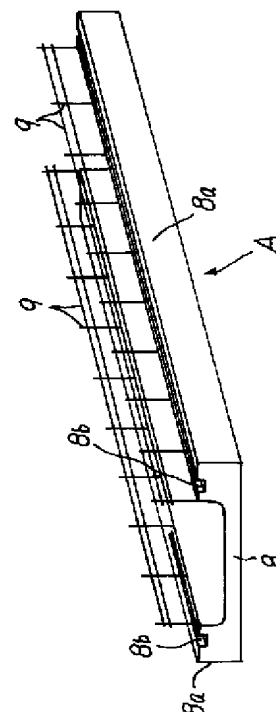
(74)代理人 弁理士 杉村 暁秀 (外5名)

(54)【発明の名称】 基礎梁の梁底用部材と基礎梁工法

(57)【要約】

【目的】 建物の基礎梁構築作業の能率を向上すると共に、省力化をはかること。

【構成】 基礎梁の梁底部分8をプレキャストコンクリートにより形成する。その両側の長辺部をそれぞれ上方に突出させると共に、この突条8a中に梁の両側面を形成する型枠14の受け溝8bを形成する。また梁の補強筋9の一部を前記コンクリート部材8より突設して基礎梁の梁底用部材Aを一体に形成する。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 基礎梁の梁底部分をプレキャストコンクリートにより形成し、その両側の長辺部をそれぞれ上方に突出させると共に、この突条中に梁の両側面を形成する型枠の受け溝を形成し、梁の補強筋の一部を前記コンクリート部材より突設したことを特徴とする基礎梁の梁底用部材。

【請求項2】 請求項1記載の梁底用部材を所定の深さに掘削した地盤上の所定の位置に載置し、梁底用部材より突出する補強筋と接続して梁の鉄筋を組み立てた後、前記受け溝に打ち込み型枠の下端縁を挿入して打ち込み型枠をセットし、これら両側の型枠間にコンクリートを打設することを特徴とする基礎梁工法。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】本発明は、建物の基礎梁を形成する梁底用部材およびその梁底用部材を使用する基礎梁工法に関するものである。

【0002】

【従来の技術】図4は、従来の基礎梁工法の一例を示すもので、図中1は地盤、2は建物の柱、3はその柱2から突出している鉄筋、4は柱2の基部のフーチング、5は柱2、2間に設置した従来の基礎梁用の型枠、5aはその梁底用型枠、6はその梁底を支える支保工、7は基礎梁5上に突設した鉄筋である。

【0003】

【発明が解決しようとする課題】従来の基礎梁工法は、図4に示すように、フーチング4、4間の地盤1上に、梁底レベルに合わせて梁底用型枠5aを設置すると共に、この型枠5aを支保工6等により支承するものであるから、作業が複雑であるという問題点があった。

【0004】また基礎梁の内部には、墨出しされた位置に配筋するが、この配筋の位置精度が悪いと、型枠の建て込みができなくなったり、コンクリートのかぶり厚さが不足したりするので、この配筋精度を高めるために配筋の手直しをしなければならないから、多くの労力を要する上に、作業効率が悪いという問題点があった。

【0005】また従来使用していた型枠は、組み立て解体が面倒である上に、一度しか使用しないため無駄が多いという問題点もあった。

【0006】

【課題を解決するための手段】上述の問題点を解決するため本発明においては、基礎梁の梁底部分をプレキャストコンクリートにより形成し、その両側の長辺部をそれぞれ上方に突出させると共に、この突条中に梁の両側面を形成する型枠の受け溝を形成し、梁の補強筋の一部を前記コンクリート部材より突設して基礎梁の梁底用部材を構成する。

【0007】また基礎梁工法としては、前記した梁底用部材を所定の深さに掘削した地盤上の所定の位置に載置

し、梁底用部材より突出する補強筋と接続して梁の鉄筋を組み立てた後、前記受け溝に打ち込み型枠の下端縁を挿入して打ち込み型枠をセットし、これら両側の型枠間にコンクリートを打設して基礎梁を形成する。

【0008】

【作用】上述の通りであるから本発明によれば、従来必要であった梁底用型枠および支保工が不要となるため、作業が簡単になって作業能率が向上する。

【0009】また一体に形成された梁底用部材を使用するから、梁の位置出しが容易であると共に、配筋精度も向上する。このため配筋の手直し作業がなくなり省力化がはかれる。

【0010】また本発明によれば、梁の側壁用の型枠は、梁底用部材に設けた受け溝に打ち込み型枠の下端縁を挿入して型枠をセットし、これら両側の型枠間にコンクリートを打設し、型枠は取り外す必要がないため、作業能率が向上すると共に、省力化も促進できる。

【0011】

【実施例】以下、図面について本発明の実施例を説明する。図1および図2は本発明の梁底用部材の実施例を示すものであり、これは、基礎梁の梁底部分8を平面形状が長方形の板状体としてプレキャストコンクリートにより形成し、その両側の長辺部をそれぞれ上方に突出させると共に、この突条8aの上面の中央部に梁の両側面を形成する型枠の受け溝8bを形成し、梁の補強筋9の一部を前記コンクリート部材8より突設して基礎梁の梁底用部材Aを一体的に形成する。

【0012】図2は梁底用部材Aの他の実施例を示すもので、図1との相違点は、コンクリート部材8の底面の四隅部に支保工の代りとなる突起8cをそれぞれ突設した点と、コンクリート部材8の長手方向の両端面にもそれぞれ補強筋10を突設した点である。

【0013】また本発明の基礎梁工法は、まず図3(a)に示すように、地盤1を所定の深さに掘削して、その底面1a上に捨てコンクリート11を打ち、ついでこの捨てコンクリート11上に基礎梁の位置出しを行った後、図3(b)に示すように、捨てコンクリート11上に梁底用部材Aを載置して、その高さおよび方向を調整する。

【0014】つぎに図3(c)に示すように、梁底用部材Aより突出する補強筋9と接続して梁の鉄筋12、13を組み立てた後、図3(d)に示すように、前記受け溝8bに打ち込み型枠14の下端縁を挿入して打ち込み型枠14をセットし、これら両側の型枠14、14間にコンクリート15を打設する。

【0015】なお図中16はトレンチビット、17、18、19はこのトレンチビット16を囲むプレキャストコンクリート板、20はトレンチビット16の反対側の打ち込み型枠14上に設けたプレキャストコンクリート板、21は埋め戻した土砂である。

【0016】また、この基礎工法では、梁底用部材Aに

梁鉄筋及び型枠をあらかじめ組み立て（いわゆる現場における丘組）、ひとつのユニットとし、揚重機により、所定位置に載置するようにすれば、さらに省力化できる。

【0017】

【発明の効果】上述の通りであるから本発明によれば、従来必要であった梁底用型枠5a（図4参照）および支保工6が不要となるため、作業が簡単になって作業能率が向上するという効果が得られる。

【0018】また本発明では、一体に形成された梁底部材Aを使用するから、梁の位置出しが容易であると共に、配筋精度も向上する。このため本発明によれば、配筋の手直し作業がなくなり省力化がはかれる。

【0019】また本発明によれば、梁の側壁用の型枠14は、梁底部材Aに設けた受け溝8bに打ち込み型枠14の下端縁を挿入して型枠14をセットし、これら両側の型枠14, 14間にコンクリート15を打設し、型枠14は取り外す必要がないため、作業能率が向上すると共に、省力化も促進できるという効果が得られる。

【図面の簡単な説明】

【図1】本発明の梁底部材の実施例を示す斜視図である。

【図2】本発明の梁底部材の他の実施例を示す斜視図である。

【図3】(a)～(d)は、本発明の基礎梁工法の工程説明

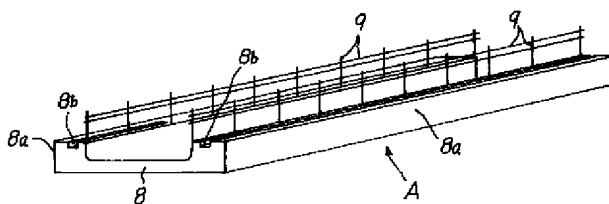
図である。

【図4】従来の基礎梁工法の一例を示す立面図である。

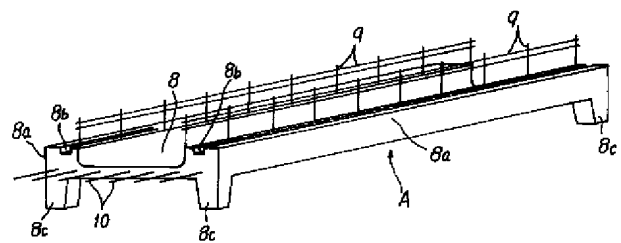
【符号の説明】

- | | |
|----------------|----------------|
| 1 | 地盤 |
| 2 | 柱 |
| 3 | 鉄筋 |
| 4 | フーチング |
| 5 | 型枠 |
| 5a | 梁底用型枠 |
| 6 | 支保工 |
| 7 | 鉄筋 |
| 8 | 梁底部分（コンクリート部材） |
| 8a | 突条 |
| 8b | 受け溝 |
| 8c | 突起 |
| 9 | 補強筋 |
| A | 梁底部材 |
| 10 | 補強筋 |
| 11 | 捨てコンクリート |
| 12, 13 | 鉄筋 |
| 14 | 打ち込み型枠（型枠） |
| 15 | コンクリート |
| 16 | トレンチピット |
| 17, 18, 19, 20 | プレキャストコンクリート板 |
| 21 | 埋め戻した土砂 |

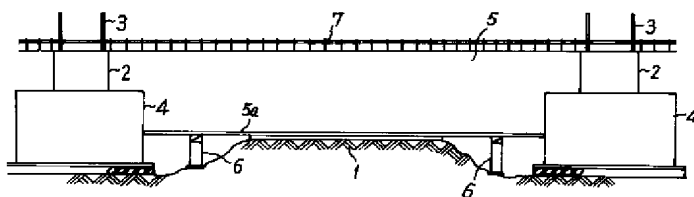
【図1】



【図2】



【図4】



【図3】

